

趣意書

今回のテーマは、「上林暁の風景描写」として、上林の郷土に関係した作品約百編の中から、35編を取り上げて紹介していますが、作品の制作に当たって小説や随筆集を読み込んで行くうちに、風景描写だけではなく、昭和初期の頃の地域の生活習慣も分かりやすく表現されていることから、それも楽しみの一つとして展示しました。

展示作品は、上林作品でも有名なものばかりなので、既に何度か読まれている方には、興味を損なう選択かもしれませんが、当時の生活習慣などを懐かしむことでご覧いただけたらと思います。

また、若い世代の方には、現代では想像もつかないほどの時間や空間が、遊びや交通などの随所で紹介されていますので、現代社会との違いなど比較しながらご覧ください。

なお、添付している画像は、作者のイメージの範囲なので、決して当時の場所や風景と合致するものではありません。そして、旧仮名遣いは、原文を尊重しての記載としています。旧漢字の妙も合わせてお楽しみください。

そして、まだ上林作品をお読みになられてない方には、これを機会にそれぞれの作品続きなどを読んでいただき、上林ファンになっていただければ幸いです。今後、何かの機会に、展示の場所に通り掛かった時には、暁が描写した表現を思い起こし重ね合わせていただくと、何げなく見ていた風景も変わって見えるかもしれません。

暁は、風景描写について、「野に出て」という随筆で、次のように記述しています。

僕は最近、この野原の風景を書いて、一つの作品を発表した。その作品を書くまでには、ルソオの「孤独なる散歩者の夢想」やギッシングの「ヘンリ・ライクロウトの手記」や、佐藤春夫の「田園の憂鬱」、その他を参考に読み、暇さえあれば幾度もこの野原へ出た。その時野原は生命に充ちて僕の前にひろがり、僕は野の隅々まで目を配って、その微かな息吹きをも見おとすまいとした。しかしその作品を書きあげてしまふと、あれほど興味をもつて讀んだ書物ももうなんの興味もなく、野に出て、前のごとく張りきつた生命を感じることができず、いはば藻抜けの殻の野をさまよふ氣持だつた。(中略)

僕は僕なりに、自分の作品に、野の生命を吸収しつくしたせみにちがひない。けれども僕は、きれいな空気を吸ひたくなると、やはり時々その野原に出てゆくのだった。

末筆に、今回の企画展に際して、今昔写真をご提供くださった故宮地一米氏の御遺族をはじめ、取材協力をいただいたすべての方々に、この誌面を借りて心より御礼を申し上げます。

館 長

第40回上林暁文学館企画展

上林暁の風景描写

～幡多ところどころ～

自 令和4年2月7日
至 令和4年4月30日



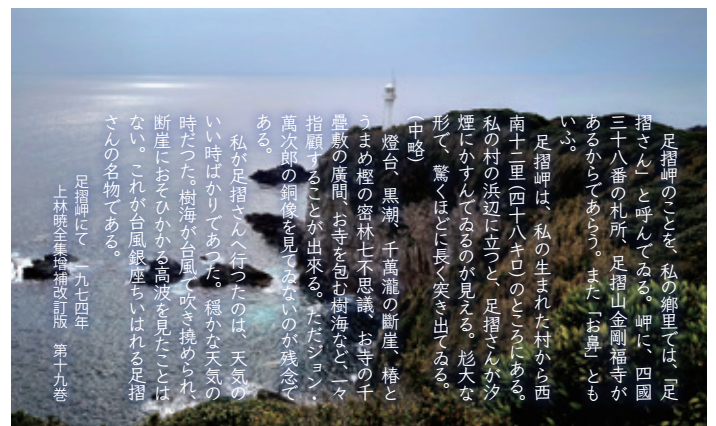
大方あかつき館報

あかつき

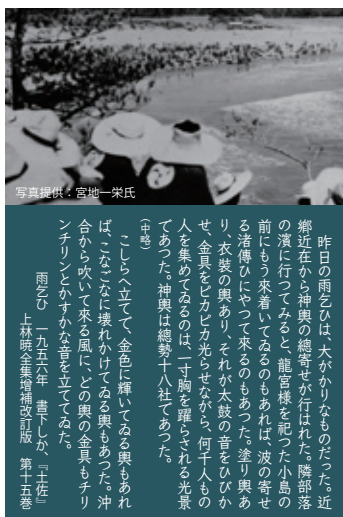
第 37 号
2022年8月発行



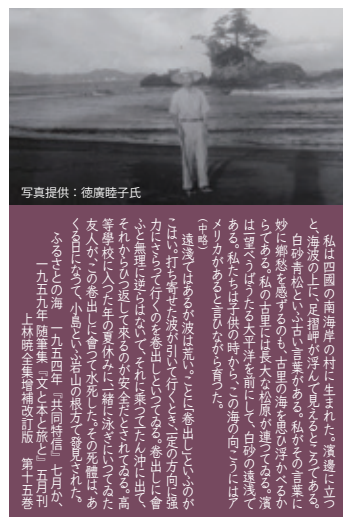
「甲い鳥」1947年



「足摺岬にて」1974年



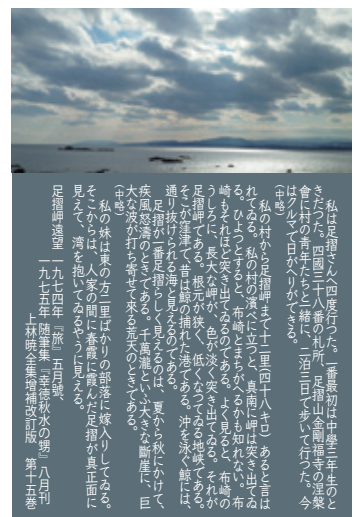
「雨乞ひ」1956年



「ふるさとの海」1954年



「波間」1936年



「足摺岬展望」1974年



「ウマメガシ」1955年

いつか井伏鱒二氏が、「君、土佐の室戸に行くと、ウマメガシの木が「ぱい生えてるねえ」と賞美したことがあった。

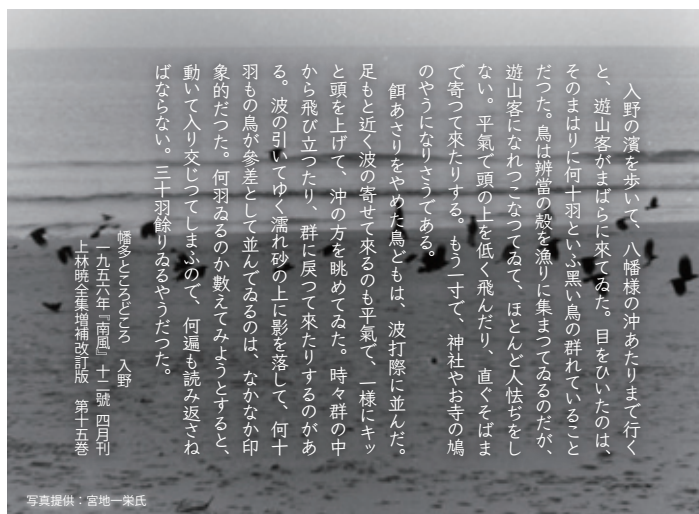
土佐は私の郷里であるが、私はウマメガシといふ木を知らなかった。私は生ま返事しか出来なかった。同じ土佐の海岸でも、私の生まれたのは室戸岬とは反対の方なので、私の村なんかにはウマメガシは生えていないのではないかと思った。それにしても、井伏氏がそんなに賞美するくらいだから、ウマメガシといふ木は、よそでは餘程珍しい木にちがひないと思われた。

この春私は國へ歸つてゐて、一日妹の片づいてゐる港村へ行った。義弟と二人で波止場の方へ歩いてゐたとき、私はその崖に「ぱい生えてゐる灌木に目を留めた。子供の時分から見慣れてゐる木ではあるが、つひぞ今まで名を知らなかった。井伏氏の賞美してゐたウマメガシといふのは、もしかしたらこれなのかも知れないと思ったので、私は義弟にたづねてみた。やはり、それがウマメガシだった。

(中略)

私は井伏氏に便りをする序でに、ウマメガシの小木を庭に植ゑたことを報じた。私にウマメガシを教えてくれた因縁を重んじたのである。

ウマメガシ 一九五五年 不詳『土佐』
上林晩全集増補改訂版 第十五巻



入野の濱を歩いて、八幡様の沖あたりまで行くと、遊山客がまばらに來てゐた。目をひいたのは、そのまはりに何十羽といふ黒い鳥の群れていることだった。鳥は辨當の殻を漁りに集まつてゐるのだが、遊山客になれつゝなつてゐて、ほとんど人怯ぢをしない。平氣で頭の上を低く飛んだり、直ぐそばまで寄つて來たりする。もう一寸で、神社やお寺の塙のやうになりさうである。

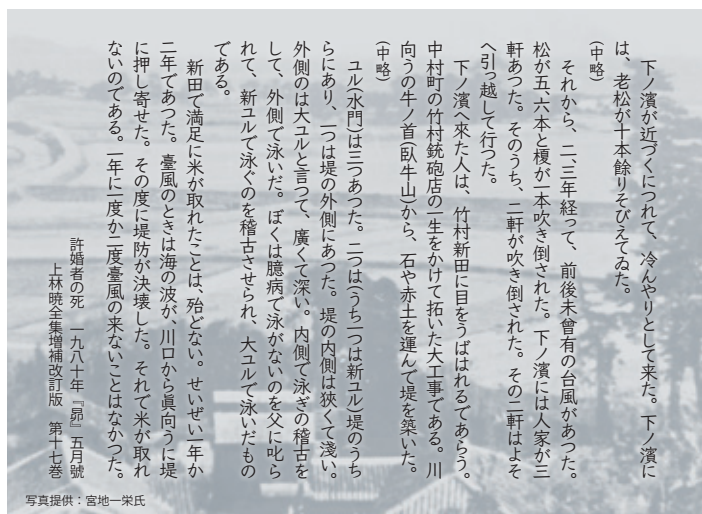
餌あさりをやめた鳥どもは、波打際に並んだ。足もと近く波の寄せて來るのも平氣で、一様にキツと頭を上げて、沖の方を眺めてゐた。時々群の中から飛び立ったり、群に戻つて來たりするのがある。波の引いてゆく濡れ砂の上に影を落して、何十羽もの鳥が參差として並んでゐるのは、なかなか印象的だった。何羽あるのか數えてみようとする、動いて入り交じつてしまふので、何遍も読み返さねばならない。三十羽餘りあるやうだった。

幅多ところどころ 入野

一九五八年『南風』土 號 四月刊
上林晩全集増補改訂版 第十五巻

写真提供：宮地一栄氏

「幅多ところどころ 入野」1956年



下ノ濱が近づくにつれて、冷んやりとして來た。下ノ濱には、老松が十本餘りそびえてゐた。

(中略)

それから、二三年経つて、前後未曾有の台風があつた。松が五六本と横が一本吹き倒された。下ノ濱には人家が三軒あつた。そのうち、二軒が吹き倒された。その二軒はよそへ引越して行つた。

下ノ濱へ來た人は、竹村新田に目をうばはれるであらう。中村町の竹村銃砲店の一生をかけて拓いた大工事である。川向うの牛ノ首臥牛山から、石や赤土を運んで堤を築いた。

(中略)

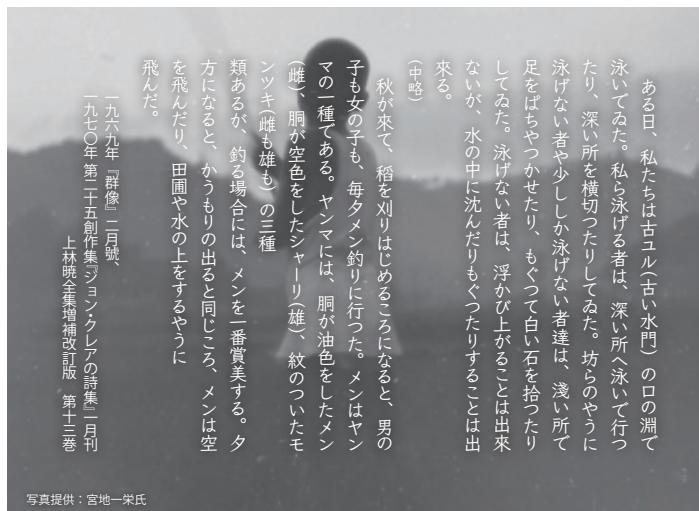
ユル水門は三つあつた。二つはうち二つは新ユル堤のうちらにあり、一つは堤の外側にあつた。堤の内側は狭くて浅い。外側は大ユルと言つて、廣くて深い。内側で泳ぎの稽古をして、外側で泳いだ。ぼくは臆病で泳がないのを父に叱られて、新ユルで泳ぐのを稽古させられ、大ユルで泳いだものである。

新田で満足に米が取れたことは殆どない。せいぜい一年か二年であつた。臺風のときは海の波が川口から眞向うに堤に押し寄せた。その度に堤防が決壊した。それで米が取れないのである。一年に一度か二度臺風の來ないことはなかつた。

許嫁者の死 一九八十年『土』五月號
上林晩全集増補改訂版 第十七巻

写真提供：宮地一栄氏

「許嫁者の死」1980年



ある日、私たちは古ユル(古い水門)の口の淵で泳いでゐた。私ら泳げる者は、深い所へ泳いで行つたり、深い所を横切つたりしてゐた。坊らのやうに泳げない者や少ししか泳げない者達は、浅い所で足をばちやつかせたり、もぐつて白い石を拾つたりしてゐた。泳げない者は、浮かび上がることは出来ないが、水の中に沈んだりもぐつたりすることは出来る。

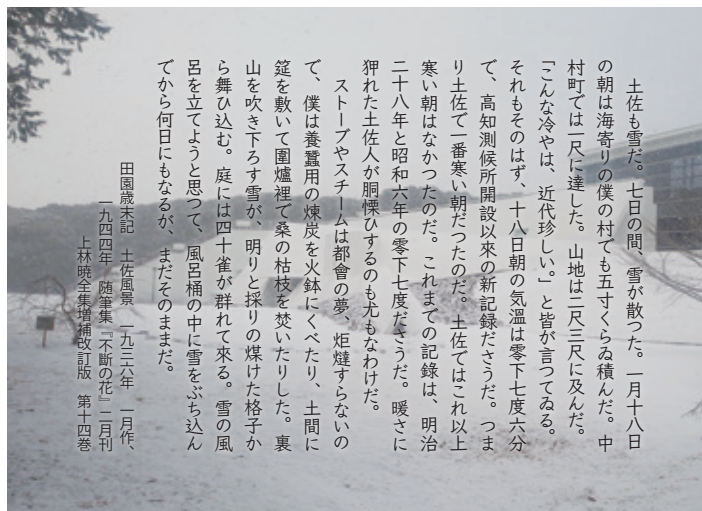
(中略)

秋が來て、稻を刈りはじめるころになると、男の子も女の子も、毎夕メ釣りに行つた。メはヤンマの一種である。ヤンマには、胴が油色をしたメ(雌)、胴が空色をしたシヤリ(雄)、紋のついたモンツキ(雌も雄も)の三種類あるが、釣る場合には、メを番賞美する。夕方になると、かうもりの出ると同じころ、メは空を飛んだり、田圃や水の土をするやうに飛んだ。

一九六九年『群像』二頁
一九七〇年第十五創作集『シヨクレアの詩集』月刊
上林晩全集増補改訂版 第十二巻

写真提供：宮地一栄氏

「坊」1969年



土佐も雪だ。七日の間、雪が散つた。一月十八日の朝は海寄りの僕の村でも五寸くらゐ積んだ。中村町では一尺に達した。山地は二尺三寸に及んだ。こんな冷やは、近代珍しい。」と皆が言つてゐる。それもそのはず、十八日朝の気温は零下七度六分、高知測候所開設以來の新記録ださうだ。つまり土佐で一番寒い朝つたのだ。土佐ではこれ以上寒い朝はなかつたのだ。これまでの記録は、明治二十八年と昭和六年の零下七度ださうだ。暖さに狎れた土佐人が胆慄ひするもの尤もなわけだ。

ストーブやスチームは都會の夢、炬燵すらないので、僕は養蠶用の煉炭を火鉢にくべたり、土間に箆を敷いて圍爐裡で桑の枯枝を焚いたりした。裏山を吹き下ろす雪が、明りと採りの煤けた格子から舞ひ込む。庭には四十雀が群れて來る。雪の風呂を立てようと思つて、風呂桶の中に雪をぶち込んでから何日にもなるが、まだそのままだ。

田園歳末記 土佐風景 一九三三年 一月作、
一九四四年『隨筆集』二不の花 二月刊
上林晩全集増補改訂版 第十四巻

「田園歳末記 土佐風」1936年



写真提供：宮地一栄氏

私の郷里、幡多郡大方町には立派な町営の野球グラウンドがある。数年前、帰郷した折見に行つたが、松原の外側に太平洋に面して、白濱の上に廣大なグラウンドが出来てゐた。ホームからセンターの一番深い所まで、百何十メートルとかあると町長が言つてゐた。

今年の冬から、此所がプロ野球、南海ホークスのキャンプ地になつた。選手達は中村市に泊まつてゐて、練習に通つてゐるさうである。この間練習の風景が、NHKのテレビに出てゐた。

私はこれから南海ホークスのファンにならうと思つてゐる。私はプロ野球には興味がなく、関心を持たない。テレビもめつたに見ない。多少興味と関心を持つてゐるのは巨人である。プロ野球よりも、高校野球や大学野球の方が面白い。それが南海ホークスをひいきに仕様といふのである。そのためには南海のことなんにも知らないから、まづ實力はどんな風であるかを知らなければならぬと思ふ。かうして、南海ホークスの入りのファンが出来上がるのである。私の郷里の人達も大方南海ファンであらう。

郷里の野球グラウンド 一九六九年「南風」六月號
一九七五年「随筆集 幸福の秋の巻」八四頁
上林隆全集増補改訂版 第十五卷

「郷里の野球グラウンド」1969年



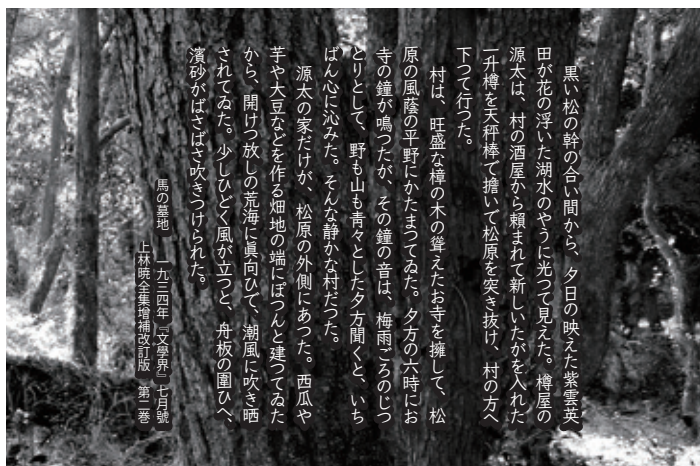
写真提供：宮地一栄氏

峠を登りつめると、積土を深く断り開いた道の向こうに海の青い水平線が見え、涼しい風が吹いて来る。そこを通りぬけて少し行くと、右手の高みにきれいな、冷い清水が粘土の間から湧いて小さな水溜まりをつつてゐる。夏になると、この峠を歩き来るひととは必ずこの清水を飲んでゆく。両手で掬つて飲むもの、石蔵の葉を漏斗形にして汲んで飲むもの、鼻も眼も頬つた水がびたしにして口づけに飲むもの、とりである。

兼をち親子も、すでに今朝から何度もちち寄つたけれど、通る度に咽喉が渇き、今も車を泉の下のおくにおく、あがつて行つて、両手で掬ひ飲み、泉のそばの羊歯のかけに腰をおろして休みした。海から来る風が胸元に涼しかった。そこからは、彼の部落の一部分も見え、松原、松原の外白い濱、海の中の小島、それから川口の磯なども見えるのだつた。

海の涅槃 不詳「田舎通信」
上林隆全集増補改訂版 第五卷

「海の涅槃」不詳



馬の墓地 一九三四年「文藝春秋」七月號
上林隆全集増補改訂版 第五卷

「馬の墓地」1934年



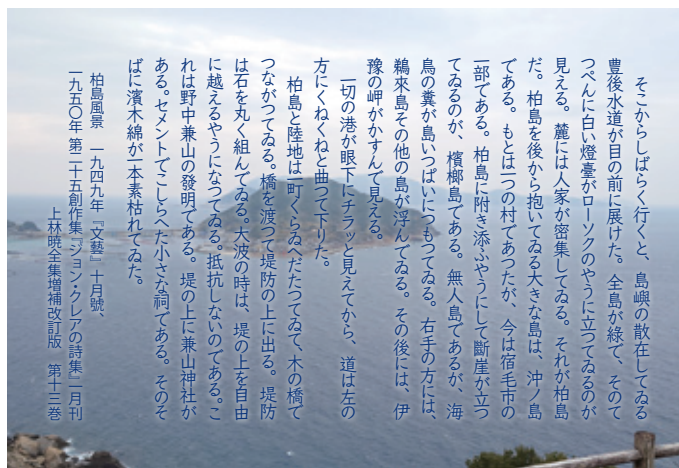
「故郷の冬」1959年



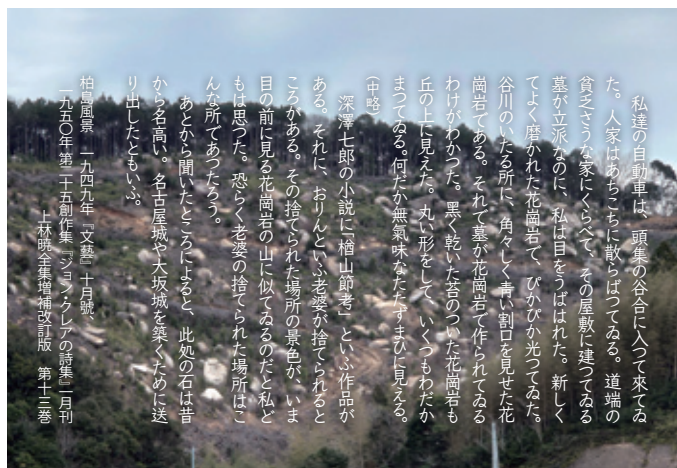
「龍舌蘭」1978年



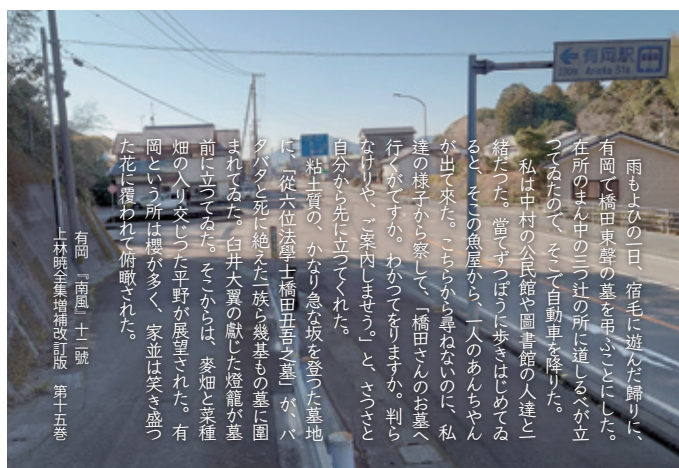
「櫻貝」1956年



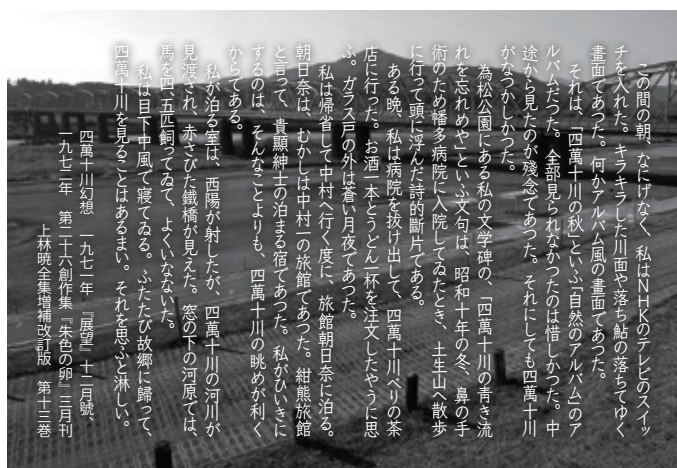
「柏島風景」1949年



「柏島風景」1949年



「幅多ところどころ 中村」1956年



「四万十川幻想」1971年

現在開催中の企画展

上林暁文学館 第42回企画展

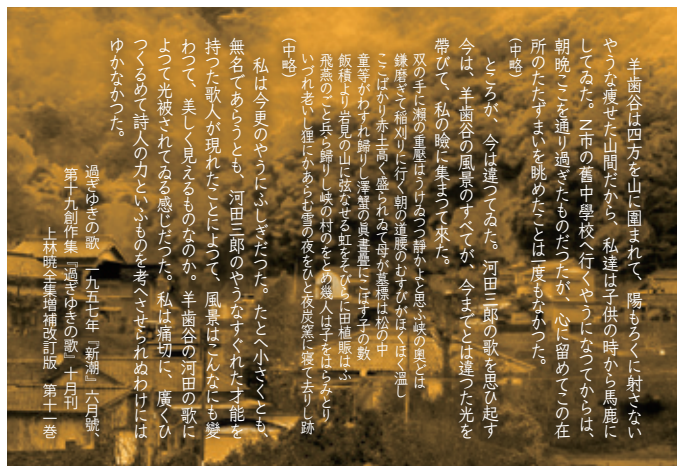
母たちの青春時代

高校生の平和学習から

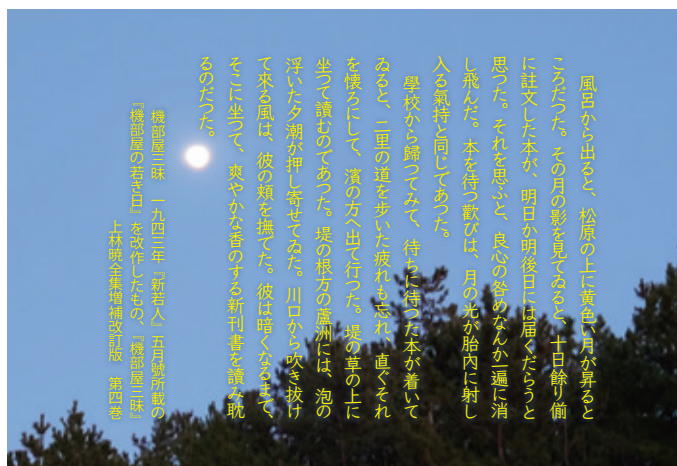
会 期：令和4年（2022年）7月22日～9月28日
（開館時間）平日10:00～18:00 （休館日）毎週木曜日、祝祭日
土日10:00～17:00

主 催：上林暁文学館
資料提供：高知県立宿毛工業高等学校
幡多文学研究 編集者 柴田 清

1990年当時の高校生が親や祖父母から聞いた戦争体験談等をパネル展示で紹介。
学制発令150年前期展示イベント。



「過ぎゆきの歌」1957年



「機部屋三昧」1943年